

## パネルディスカッション

テーマ：国際競争力のあるモノづくり『オリジナリティーのあるデザイン開発をめざして』

### パネリスト

丹後宏一氏・丹後商事(株) 常務取締役  
平元 昭氏・(株)繊維リソースいしかわ 常務取締役  
川本敦久氏・金沢美術工芸大学 教授 (T.D.A.)  
杉山哲三氏・(株)セルコン デザイン室長 (T.D.A.)  
山崎昌久氏・(株)大丸本社 デザインオフィス部長 (T.D.A.)

### コーディネーター

山口道夫氏・アトリエ ヤマガチ主宰 (T.D.A.)

山口 | 従来、テキスタイルデザインというと狭義な解釈が一般的で、どのような色付けにするかとか、どのような意匠にするのかということが重要な問題でした。しかし、現在ではどのような材料をどのように組み合わせ、どんな布を造るのか、また風合い・色・柄等を含めてどのような製品を意識して造るのが重要な問題となっています。今日では、後進国の追い上げとヨーロッパ等先進国のファッションブルな展開のモノづくりとの間にある日本のテキスタイルデザインは、非常に辛い立場にあると言えます。このような状況の中で北陸を考えると、金沢にはいろいろな伝統工芸の技（ローテク）と化繊のハイテク技術があります。そういったものをどうミックスするかということに新しいモノを生み出す機つかの道があるのではないかと考えられます。

このような事を背景に本日のテーマを考えてみると、「オリジナリティーのある」とは、どの様にどんな基準で考えればオリジナルと言えるのか？ もし、良く売れる商品作りを目的に考えるのであれば、議論を待つまでもないことであり、当然オリジナルとは商品の中で絶対的価値を持つものなのか、という疑問に突き当たってしまいます。各パネラーの方々には本日の表題に対して、それぞれの解釈・切り口で語って頂きたいと思います。丹後 | いわゆる機屋の立場からの意見ということで、まず北陸の特徴を整理してから、テーマに触れて行きたい。北陸は戦後、合繊メーカーとの取組を基本として経営の安定を計って来た歴史を持っており、決められたモノをつくる生産力はあるが開発力・ソフト力に不足があるという特徴が第1にあげられる。第2に何台かの織機だけを持って生産している所が沢山有るといふ、零細性の問題があげられる。第3に素材メーカーの傘下において、下請け体質が強く直接の販売ルートを持っておらず、消費者のカオを見てのモノづくりが出来ていない。といった事があげられ、言わば生産の集積度は高いが産地形態を成していないということになる。

つぎに国際競争力について言えば、合繊8社の世界に占めるシェアは8～9%であり、量的にも價格的にも日本はイニシアチブを取れない状況になっている。また量の行く廉価商品はアジアとの競争で難しくなっており、

高級品は量に繋がらずECとの比較になる。このような状況の中では輸出も含め、ターゲットを絞った中で顧客のカオが見えたソフト力が無ければどうしようもないと考える。

「オリジナリティー」とは「他との違い」の認識に立って「差別化」と言うことに集約されると考える。石川産地では、複合の進展がオリジナル作りの1つの切り口になる。素材感の複合や個性結合は勿論、メーカー系列を外したメーカー品の複合ということもキッカケ作りを含めて考えねばならない。同じポリエステルでも色々な糸があり、ファブリケーションでのオリジナル作りが今後の課題と考える。

平元 | 当産地のことを多少触れて本題を語りたい。戦前は絹織物をと生産していた訳で、元々から言われた事をコツコツとやるモノづくりが得意な産地であった。また繊維機械のメーカーも県内に数多く、海外にも輸出をしていたということも有り、これと共に繊維産業が発展してきたとも言える。更に裏地など、あまり時代の表に出てこない特殊なものも沢山手掛けてきたこともあり、仮需で動いてきたという生産基地の歴史を持っている。繊維リソースは、このようなコツコツ型に知恵を付けよう、ソフトを充実させようということから誕生した訳で5年になる。

オリジナリティーについては、織物の分解・設計を含めて捉えたいと考えている。と言うのは図柄だけで捉えた時、京友禅の柄を加賀友禅で使えば模倣になるが、丸谷焼の図柄を帯に使うと分類が違うので通ってしまうという事実。日本では海外等の生地サンプルを持ってきてシルクをポリエステルにしてといった事をやってきた。これがオリジナルかということになるが、こうやって日本が発展してきたのも事実である。しかし、昨年当地で展開したカジュアルデーの成功にも有るように、作者と考える者、売る者が一緒にやる事が1つの道を開くことになるのではないかと考える。石川県には、合繊の生産量やタクシーの数等全国で1・2を誇る事が沢山あるが、伝統工芸やデザインに係わる人間も随分といるので、数だけでなく質の向上を目指して頑張れる筈と思う。

川本 | 教育の観点から言うと、金沢美大には科や専攻は無く、工芸デザインの中にテキスタイルデザインがあり、工芸の要素とデザインの要素を兼ね備えた中で考えている。そして工業的な中ではなく、工芸として捉えた中でデザインを考えている。と言うのは、工業的な中でのデザインは開発技術や応用技術、生産方法、市場要因などによって管理・操作されており、この合理性によって評価されている。これに対し工芸の中では、歴史的蓄積や伝承、偶然性を背景にして表現を行っており、人間の個性という非合理性によって価値を作り上げているという違いがある。また工芸にも量産の側面が当然有った訳で、それが工業化されてデザインとなったのであり、もう一つの側面として工芸美術の世界が有るのである。だから工芸の捉え方を基本に置いて工業の中に取り入れて行くという考え方を取っているのである。このような考え方からオリジナリティーは国際競争力に繋がるかということ言えば、繋がると言える。人間の個性（その人らしさ）を重視するということは、1つの地域・会社、そして国にも通じる訳で、それぞれが「らしさ」の発見をしなければならないということになる。欧米の文化をいろいろ導入してきた今日、日本独自の思想・哲学が必

